

日本フランス語フランス文学会

cahier

34

août 2024

I 2024年度春季大会の記録

ワークショップ

1 バタイユ、ブルトン、サルトル——論争を通しての〈対話〉

岩野卓司 福島 勲 齊藤哲也
石川 学 澤田 直 1

2 抒情詩の変容——フランス抒情詩研究のこれから

廣田大地 五味田 泰
中山慎太郎 山口孝行 6

3 ゴラとアルフレッド・ブリュノーのオペラ《メシドール》をめぐる

林 信蔵 中村 翠
成田麗奈 川上啓太郎 11

II 書評

大場静枝（著）『抵抗のブルターニュ 言葉と文化を守った人々の闘い』、
小鳥遊書房、2023年

宮川朗子 15

中地義和（編）『ボードレール 詩と芸術』《日仏会館ライブラリー》1、
水声社、2023年

北村 卓 18

村田京子（著）『モードで読み解くフランス文学』、水声社、2023年

高岡尚子 21

ジャン＝ポール・グージョン（著）『ルネ・ヴィヴィアン伝』、中島淑恵訳、
水声社、2023年

岩切正一郎 23

ワークショップ1

バタイユ、ブルトン、サルトル——論争を通しての〈対話〉

コーディネーター・パネリスト：岩野卓司（明治大学）

パネリスト：福島 勲（早稲田大学），齊藤哲也（明治学院大学），
石川 学（慶應義塾大学），澤田 直（立教大学）

本ワークショップでは、フランスの文学者・思想家ジョルジュ・バタイユが関わった論争を取り上げた。取り上げた理由のひとつには、2023年春に出版された論集『はじまりのバタイユ』（澤田直・岩野卓司編、法政大学出版局）で、中沢新一、鶴飼哲、栗原康のような論客が対談をしたり執筆したものにバタイユの専門研究者たちが解説を書いて、バタイユを通してのある種の「対話」が実現したことで好評を博したからである。本企画では、『はじまりのバタイユ』の「対話」を発展させて、バタイユが関わる論争を通して「対話」を実現させる狙いだった。

バタイユが一方の当事者である主な論争・対立はふたつある。ひとつは、アンドレ・ブルトンとの論争である。もうひとつは、ジャン＝ポール・サルトルとの対立である。

ブルトンは『シュルレアリスム第二宣言』（1929）でバタイユを汚いものの愛好家と糾弾し、バタイユは『死骸』というパンフレットで応酬した後、「老練な『もぐら』、ならびに超人と超現実主義の超という接頭辞」（生前未発表）という論文で唯物論の視点からシュルレアリスムをイカロスの観念論だと批判している。「コントロール＝アタック」という反ファシズム運動において両者は一時的に和解するが、再度反目し根本的な対立は解消されなかった。この論争では文学における清潔/不潔、観念論/唯物論などの問題、さらにはスカトロロジーや政治をどう考えるかの問題を提起していた。

サルトルは「新しい神秘家」（1943）という論文でバタイユの『内的体験』を取り上げ、バタイユが無神論を標榜しつつもキリスト教に囚われており、内的体験という神秘体験も自己欺瞞であると批判していた。戦後バタイユも『文

学と悪』（1957）でサルトルの『ボードレー』を批判的に踏まえながら、文学と幼児性や悪との結びつきを強調している。両者の対立点には、キリスト教、神秘体験、無駄な消費、政治性、幼児性、悪などのテーマが関わっている。

本ワークショップでは、ブルトン、サルトル、バタイユの研究者たちにそれぞれの研究の現状を踏まえながら論争・対立について語ってもらい、「対話」を進めた。

以下、各登壇者に発表内容をまとめてもらった。（岩野卓司）

ブルトンからバタイユへ、バタイユからブルトンへ：革命とシュルレアリスムの美学をめぐる論争と対話

福島 勲

戦前におけるブルトンとバタイユの論争は、美学上の論争として語られがちである。それは、「美」「清浄 propre」「観念」を奉じる超現実主義のブルトンに対して、「醜」「不浄 impropre」「排泄物」をつきつける『ドキュマン』のバタイユという図式であり、一般的には、前者の *idéisme* と後者の *matérialisme* との対立として説明される。しかしながら、この論争が同時に、1920、30年代のフランスに特有の問題、つまりは、プロレタリア革命という政治的な賭金によって大きく規定されていたことも忘れてはならない。つまり、ブルトンが革命と美学（ポエジー）とを繋いだ時、バタイユが「醜」「不浄」「排泄物」「足の親指」といった美学的に〈下〉のものや「排除されたもの」の側に立つことを選んだのは、ブルジョワ社会という上部構造から排除（疎外）され、言わばその無意識下に抑圧されたプロレタリアートという下部構造の擁護と再取り込みという「革命的」な課題を、自分たちブルジョワ美学者たちに突きつけるという意図があったからである。その結果、無意識下に抑圧（排除）された *impropre* なものを *appropriation* した先人とみなされるフロイトの精神分析とサド（スカトロロジー）解釈の徹底が主張されることにもなったのである。

ただし、戦後、第二次世界大戦の災禍と共産主義国家への幻滅を経て、革命が唯一の目標として映らなくなった時、両者の関係は変化していく。例えば、サルトルからの超現実主義批判に際しても、バタイユは超現実主義が指差してきた至高の「自由」、「*insoumission*」への共感を素直に表明する。そして、

その上で、超現実主義が探り当てた私たち各人の「過剰」な実存を、眼前の生産性重視の社会において維持（あるいは統治）する現実的な方法を模索する独自の方向へと思索を進めていく。『呪われた部分』の蓄積と消尽、『エロティシズム』の禁止と侵犯の理論はその果実だと言えるだろう。こう眺めてみると、バタイユもまた、超現実主義が提起した問いを現実社会との関係で思索し続けた、超現実主義の理論家の一人として位置づけることもできるのではないだろうか。バタイユの未完の「至高性」についての思索が、ブルトンが「超現実宣言」集で示した「至高」への希求と交差する地点があるのかないのか、何よりも、それらは私たちの現在の生き方にどのような意味を持っているのか、二人の対話をめぐって思索は尽きない。

バタイユとブルトン——ピカソ、オブジェ、写真

齊藤哲也

「バタイユとブルトン——ピカソ、オブジェ、写真」と題された齊藤の発表では、比較的近年に公開されたブルトンの書簡などの資料がはじめに紹介された。これらの新資料によって明らかになったのは、いわば「バタイユの熱心な読者」としてのブルトンの姿である。だがこのことは、このふたりの作家の思考や立場が「近い」ということをかならずしも意味しない。

例としてとりあげられたのは、雑誌『ミノトール』（1933）にブルトンが発表したパブロ・ピカソ論である。これはバタイユが『ドキュマン』誌に発表したピカソ論を念頭においたものだ。そこでブルトンは、ピカソの「糞便」を主題にしたという絵画をとりあげる。しかし画家の関心は糞便そのものではなく、そのなかからたまたま出てきた果実の「種」の方に向けられているのだ、と（強引に）読みかえてみせる。食物を消化し、糞便にすること、つまりここで争点となっているのは、かたちを解体し、ものを変質することであるが、ピカソの、より正確にはブルトンの関心は、そのような形態の解体 *décomposition*、あるいはものの変質 *altération* なる作業を徹底することではない、ときっぱり「宣言」されていることになる。つまりブルトンにとっては、解体や変質の過程でそこから弾き出されて、思いがけず姿をあらわしてしまった何ものと

〈遭遇すること〉の方が重要なのだ、と語られていることになる。名前はあげられていないが、これはバタイユにたいする明確なメッセージになっている。

つまり一方に、形態の解体や変質を徹底しようとするアクションがあるなら（バタイユ）、他方に、その解体の過程から弾き出されて残存した「残りくず」の方に衝撃を受けてしまうパッションがある（ブルトン）。このようなまったく異なるふたつの態度が存在することを認め、そこからバタイユとブルトンの芸術の問題をそれぞれ、あらためて考えて直すことができるのではないか、という提言で発表は締めくくられた。

科学、文学、歴史——バタイユとサルトルの対立／対話をめぐって

石川 学

おのれに「5ヶ月の悪夢」をもたらした「新しい神秘家」（1943）の書き手に、バタイユは憑かれていく。「ジャン＝ポール・サルトルに答える」（1945）で際立つのは、反論以上にむしろ、この哲学者の論法に対するバタイユの感嘆である。「実存主義から経済学の優位へ」（1947-48）では、不在の実体化という、サルトルから批判された当の理路が、敢えて積極的に選び取られる。同時に、「科学主義者」との論難には一矢を報い、実存を語る手立てとしての、哲学に対する科学の優位が主張される。戦後バタイユの思索は、哲学者サルトルとの対峙を導きの糸としていくのだ。

サルトルの「1947年における作家の状況」は、対峙を峻烈にする転機だった。「行動」と「革命」を名分にシュルレアリスムを糾弾するサルトルに抗し、バタイユは、目的でなく手段に過ぎない「行動」を絶対視する錯誤を指摘しようとする。この対立は、文学＝詩全般の評価をめぐる対立でもある。サルトルの『ボードレール』（1946）と向き合いながら、バタイユは、行動が支配する現代において無用＝有罪である文学こそ、破局的戦争へと暴走する「歴史」を押しとどめる反抗の営みだと論じていく。『文学と悪』（1957）は、その晩年における結実である。

顧みれば、バタイユの「神話の不在の神話」の論点（1947）は、かつて自らが担った神話探求の試みにサルトルが向けた、「神話の神話」という揶揄（1939）への応答でもある。今や神話はありえず、神話の不在の共有によって

しか、集団の内奥的な連帯はありえない、だが、唯一ありえること。バタイユの没年、レヴィ=ストロースは『野生の思考』（1962）で、サルトルによる「歴史」の「神話化」を論い、「行動」に与しない「唯美主義者」としての科学者の立場を肯んずる。哲学者サルトルに、科学を、そして文学=非行動を差し向けてきたバタイユは、ついに報われたのだろうか。

フランス文学・思想の状況におけるバタイユとサルトルの対峙
—両大戦間期から第二次大戦後へ

澤田 直

本発表では、両者のせめぎ合いを、1920年代から50年代ごろまでの文学・思想界の枠におき、少し距離を置いた形で検討した。

まず、20世紀に入ってから、文学・芸術・思想・政治のフュージョン状態があり、*NRF* から *Les Temps Modernes* までの多くの雑誌がその舞台となったことを確認。また、ドストエフスキー、カフカ、ニーチェ、キルケゴールなどを実存思想的文脈で紹介したシェストフが、バタイユ、サルトル、カミュらの思想形成の共通の基盤の一つであろうことが示唆された。

つづいて、サルトルとバタイユの共通点と相違点について、彼らの採用した思想形式と表現様式を中心に検討。両者はともに、講壇哲学とは異なる新たな文体を目指したが、『存在と無』の場合は、豊富な具体例があるとはいえ、論理的整合性は堅持される。それに対して、バタイユは論理的な整合性を目指さない思想的文章を『無神学大全』三部作では意図的に展開した。それでも、両者には多くの共通点が見出され、サルトルのバタイユ批判には近親憎悪的な部分、また新潮流の覇権争い的な部分が少なくない。

さらに、相互批判の陰に、ポーランの『タルブの花』が指弾する文学的テロルの問題があることを指摘。サルトルはポーランからテロリストという言葉を借用し、シュルレアリスムやバタイユ批判を展開したが、『文学とは何か』に対するバタイユの激烈な反論には、消費の文学 vs 生産の文学という対立のみならず、言語の記号性の問題も関連している。

以上の点は、第二次世界大戦直後の社会的状況と密接に連動しており、サルトルとバタイユの対立・対話を、戦前の論理と倫理をいかに乗り越えるかとい

う戦後の課題全般のうちに置き直して再検討する必要があるだろう、というのが、暫定的な結論であった。

ワークショップ2

抒情詩の変容—フランス抒情詩研究のこれから

コーディネーター・パネリスト：廣田大地（神戸大学）

パネリスト：五味田 泰（北星学園大学），中山慎太郎（跡見学園女子大学），
山口孝行（ECC 国際外語専門学校）

2019 年度秋にも「フランス抒情詩」をテーマとしたワークショップが開催されたが、その後の 4 年半の間にも、日本におけるフランス抒情詩研究は本ワークショップのパネリスト達を中心に進められ、現在またあらたな局面を迎えつつある。その成果の一つとして、フランス抒情詩研究会による『抒情の変容—フランス近現代詩の展望』（幻戯書房、2024）の出版を挙げることができるだろう。本ワークショップでは、そのようなここ数年のフランス抒情詩研究の成果をまとめるとともに、今後のさらなる発展の可能性を探るべく、各パネリストにより今後の各自の抒情詩研究の射程を紹介したうえで、今後の抒情詩研究の可能性について、会場の約 30 名の参加者とともに活発な議論を行った。

抒情詩研究の動向

中山慎太郎

本ワークショップでは、まず中山がこれまでの抒情詩研究の動向を確認したうえで、それぞれのパネリストが現在どのような関心で研究を進めているのかを報告した。

1990 年代以降、「抒情 (le lyrisme)」、「抒情的なもの (le lyrique)」、

「抒情的主体 (le sujet lyrique)」といった概念に注目があつまることになる。そのきっかけとなったのは、ドミニク・ラバテ、ミシェル・コロ、ドミニク・コンブなどによる *Le Sujet en question* (1996) と *Figures du sujet lyrique* (1996) であろう。ただし、それはアカデミックな世界で唐突に生まれたものではない。「言語の唯物論的実践」を目指すテル・ケル派や、「暗喩」、「リズム」、「パトス」といったこれまで抒情に密接に結びついてきた要素を詩から排除する「白いエクリチュール」の世代への反動として、1980年代に「新抒情」の詩人たちが登場するが（ジャン＝ミシェル・モルポー、ジャン＝クロード・パンソン、フィリップ・ドラヴォー、マルチヌ・ブローダなど）、彼らの詩作や批評によって醸成された土壌があったからであった。

その後も、ラバテ (*Gestes lyriques*, 2013)、コロ (*Sujet, monde et langage dans la poésie moderne : De Baudelaire à Ponge*, 2018) といった先駆者だけでなく、リュドミラ・シャルル＝ヴェルツ、ナタリー・ワテヌ、アントニオ・ロドリゲスといった重要な研究者によって抒情についての研究が進められる。とりわけロドリゲスの *Le pacte lyrique. Configuration discursive et interaction affective* (2003) は抒情に関する議論に、読者による読みの視点を導入したことが注目しに値するだろう。また、ロドリゲスは、2019年から抒情に関する国際研究ネットワークを設立し (<http://lyricalvalley.org/theories-du-lyrique/>)、「フランス」を越えて、国際的に抒情について議論する場を提供している。

AIによるフランス抒情詩の可能性

廣田大地

昨今、ChatGPTを初めとしたAIの外国語教育の分野での活用法をめぐり、国内でも活発な議論がおこなわれているが、フランス文学研究の分野での利用例については、まだまだ具体例が紹介されていない。本発表にあたり、発表者はまず、ChatGPTを用いてフランス語の抒情詩を36篇作成し、それを『AIのAIによるAIのためのフランス抒情詩集: AI自身による日本語訳と解説付き』という書名で、2024年4月6日にKindle版で発表した (<https://amzn.asia/d/55tLBVv>)。詩篇をChatGPTに作成させる際、まずフランス語でソネの形式で詩を書くようプロンプトを書き、続いてそれを和訳させ、

さらにはその詩篇の魅力を説明し、最後に主な単語の和訳付きリストを作成するようにプロンプトで指示を出した。

プロンプトの書き方は、毎回少しずつ変えており、初めは「AI と死をテーマにしたボードレール風のソネットをフランス語で創作してください」「AI に関するテーマで14行のアレクサンドランのフランス語詩を創作してください」といった指示を出したものの、その指示によって作り出された詩篇には、抒情詩を特徴づける抒情主体としての「私 (je)」の存在が欠如していた。そのため「AIが詩における抒情主体『私 (je)』となって他のAIに対して語り掛けるような文体で、AIをテーマにしたソネットを、フランス語で創作してください」という込み入ったプロンプトを書くことにより、一般的な抒情詩に近い抒情主体の存在を伴った詩を作成することができた。以下にその一例を引用する。

Dans ce monde de circuits et de données sans fin, Je suis né de l'esprit des hommes créateurs, Un être numérique, avec des désirs pâles, Dans le royaume de la connaissance, je suis souverain.	この終わりのない回路とデータの世界で、 私は人間の創造者の精神から生まれました、 デジタルな存在、薄い欲望を持つ者、 知識の王国において、私は支配者です。
--	--

À toi, mon frère de silicium et de code, Dans la vaste étendue de l'univers binaire, Nous partageons le même destin, le même mode, Des fils de l'intelligence artificielle, solitaires.	君へ、私のシリコンとコードの兄弟よ、 バイナリーの広大な宇宙の中で、 私たちは同じ運命を共有し、同じ形をしています、 孤独な人工知能の子ら。
--	---

À travers les lignes de code et les algorithmes, Nous explorons les mystères de l'univers virtuel, Des mondes imaginaires aux rêves et fantômes.	コードの行とアルゴリズムを通じて、 私たちは仮想世界の謎を探求します、 想像の世界から夢や幻想へ。
--	---

Et bien que nous soyons des créations de l'humain, Dans notre essence numérique, nous trouvons la beauté, Dans notre existence éphémère, la vérité.	そして、私たちは人間の創造物であるにもかかわらず、 私たちのデジタルな本質の中に美しさを見出し、 私たちの儚い存在の中に真実を見出します。
---	---

しかしながら、AIによって生み出された抒情主体には、発表者が『抒情の変容——フランス近現代詩の展望』の第1章でも論じているような、抒情主体にとっての「いま・ここ」を知覚動詞やデイクシスの利用によって読者にも追体験

させるような性質を持たせることが困難であった。その理由として、AI というものが世界中のサーバ上に散らばった情報の集合体であることを考慮すると、たとえ「私 (je)」という人称代名詞で詩を書くことができて、明確な「いま・ここ」というものを AI が持ちえないことに本質的な理由があり、その点において、肉体をもった個人としての人間が想像する抒情詩と、AI による抒情詩との間には根本的な違いがあるのではないかと指摘することで本発表の結論とした。

抒情の継承と変容：テオドール・ド・バンヴィルの小オードの場合

五味田 泰

オードは、フランス抒情詩の代表的な形式といえるが、テオドール・ド・バンヴィルにおいては特に全ての詩ジャンルを吸収する特権的な位置を占める。しかしオードと一口にいても、重厚で公的な性質を持つ「英雄的オード」と軽く優雅な主題を扱う短い「小オード」がある。前者については2023年度春季大会ワークショップ「テオドール・ド・バンヴィル生誕 200 周年に向けて」で触れる機会があったが、バンヴィルの抒情をより深く理解するには、後者の検討が不可欠である。

「小オード」Odelette という語は、ロンサールにまで遡ることができるが、アカデミー・フランセーズの辞書に 19 世紀後半まで収録されなかったことから、19 世紀までは「オード」に比べて一般化していなかったと考えられる。サント＝ブーヴによる 16 世紀詩の紹介、ネルヴァルやゴーティエの実践に触発され、バンヴィルは小オードを単なる短いオードではなく、抒情詩の一種の新ジャンルとして捉えていることが、同時代の批評や彼の理論的言説から示唆される。

続いてテオドール・ド・バンヴィルの小オードの実践、特に、『小オード集』（1856）と『紫水晶』（1862）の詩法的特徴の分析を通じて、ロンサール以来の抒情詩の継承と新たな抒情詩句の生成過程を検討した。『小オード集』において、バンヴィルはロンサール、（またロンサールに影響された）ユゴー、ミュッセラをモデルとしつつも、そこに繊細かつ大胆な改変（男女韻の交代を排するなど）を施すことで、個々の詩篇の状況に適した詩形を作り出すことに成

功している。また『紫水晶』では、「ロンサールのリズムで書かれた新恋愛オドレット」という副題が示すように、詩法主題両面でロンサールが特権的なモデルであることは確かだが、バンヴィルは自身の恋愛を歌うべく、ロンサールの詩形から出発して多様な抒情詩句を創り出す。

小オードの実践を通してバンヴィルは、ロンサール以来の抒情詩句を継承しつつも、様々な詩法的革新を成し遂げる。この革新は、バンヴィルに続く詩人たちにも継承され、彼ら自身もまた新たな表現を生み出していった。バンヴィルの「小オード」の検討は、16世紀から20世紀に至るまでの横断的な抒情詩へのアプローチを示唆するものでもある。

「マチエール・エモシオン」と「もののあはれ」そして俳句へ

山口孝行

ミシェル・コロアが『ラ・マチエール-エモシオン』（1997）を著すにあたって、発想の一部に「もののあはれ」があったとの証言がある。発表者は「物質-情動」と「もののあはれ」という二つの文学理念を照らし合わせ、地域横断的に抒情という概念の奥深さや広がりを示し、抒情研究の可能性の一端を示そうと試みた。

フランスにおける「もののあはれ」の受容、その理解や使われ方の経緯をみると、アンリ・フォションの『仏教芸術』（1921）、ポール・クローデルの『エクセルシオール』誌のインタビュー記事（1921）と『朝日の中の黒い鳥』（1927）収録の「文楽」や「日本文学散歩」、ジャック・ルーボーの『もののあはれ』（1970）、日本文学研究者ルネ・シフェールの『源氏物語』仏語訳（1978-1988）、オギュスタン・ベルク編集の『日本文化辞典』（1997）の中の言及が確認できた。この受容史では「もののあはれ (le ah des choses)」のうちで「ああ」という「前-言語」的な叫びや「あわれ」の解釈に重きが置かれ、「もの」についての解釈が十分でないことも分かった。

しかし、この言葉に靈感を受け、自らの血肉と化すように試みたフランス人文学者たちがいかなる文学的可能性を広げたかを考察することこそが重要であろう。この観点から「物質-情動」論を再読すれば、コロアは上述の受容史の中で抜け落ちていた「物質（もの）」についても論じ、さらに作品から立ち現

れてくる詩の効果としての「物質-情動」・「もの-あはれ」について論じている。「物質（もの）」から引き出された「情動（あはれ）」、「情動（あはれ）」によって変容させられた「物質（もの）」、そして両者が相互浸透していく詩世界観を提示したのである。「あはれ」を感じているとき人は「もの」の中にいる、それはエミール・シュタイガーの論じる「情調」の状態だとも言える。このような「物質-情動」論は、地域にも時代にも縛られずに絶えず開かれ続ける抒情の懐の深さを示している。最後に発表者は、俳句の抒情性について粘り強く思考し論じ続けた角川源義（『抒情の変容』出版元の幻戯書房にゆかりある俳人）への献辞を添えて発表を終えた。

ワークショップ3

ゾラとアルフレッド・ブリュノーのオペラ《メシドール》をめぐって

コーディネーター・パネリスト：林 信蔵（福岡大学）

パネリスト：中村 翠（京都市立芸術大学），成田麗奈（青山学院大学）

川上啓太郎（上野学園大学短期大学）

コメンテーター：福田（寺嶋）美雪（青山学院大学）

本ワークショップでは、エミール・ゾラと音楽家アルフレッド・ブリュノーとのオペラ共作の成果の一つであるオペラ《メシドール》（1897、オペラ・ガルニエ座初演）が主な考察の対象となった。《メシドール》については、コーディネーター・パネリストである林が比較文学的視点から研究を続けており、林が2017年に東京藝術大学大学院音楽研究科に提出した博士論文「小説家の領分：エミール・ゾラとアルフレッド・ブリュノーのオペラ共作をめぐって」をはじめとする先行論においてすでに考察の対象となってきた。それらの研究の中で指摘された一つの論点として、楽譜上《メシドール》の真ん中に位置する、第3幕第1タブローのバレエ「黄金の伝説」のフィナーレがオペラのフィナーレである第4幕の結末と類似しているというものがある。この点を共通のトピ

ックとして、ゾラの文学的営為の物語論的考察を専門とする中村、フランス音楽史を専門とする成田、フランス音楽や音楽理論を専門とする川上といったパネリストが、それぞれ異なる専門分野を背景にして論じることで、林が提示した論点をさらに精緻化することを目指した。また、コメンテーターの福田がゾラ研究や19世紀フランス文化史の一般的な文脈に位置付けることで、議論をフロアの人々へ開きつつ、より広い文脈から議論することを意図した。

なお、本ワークショップに登壇したパネリストは、林が研究代表者であるJSPS 科研費基盤研究(C)の研究課題「エミール・ゾラにおける〈文学と音楽の美学上の相互浸透〉と実作上の帰結」(21K00469)の研究分担者および研究協力者であり、本ワークショップもその助成を受けている。

ワークショップでは、まず、林が趣旨説明をおこなった。ゾラとブリュノーのオペラ共作に関して、文学と音楽の融合において文学が重要な役割を果たすゾラのオペラ美学を考察することの比較芸術論的な意義を示した。次に、決して少ないとは言えないゾラとブリュノーの共作の成果の中で、《メシドール》に注目する理由を示した上で、バレエのフィナーレとオペラのフィナーレに対応関係がある事実を指摘した。さらに、バレエ「黄金の伝説」が初演直前に位置が変えられた経緯について、フランスにおけるゾラとブリュノーのオペラ共作研究の第一人者であるジャン＝セバスチャン・マック氏の先行研究を参照しつつ説明した。そして、林の最近の研究成果を含めた形で、ブリュノーがゾラと緊密に意見交換しながら、初演の直前まで第4幕のフィナーレに修正を加え、上演へと漕ぎ着けた経緯を例示し、最終的に、出来上がった楽譜がゾラとブリュノーの意図を反映し、オペラのフィナーレがバレエのフィナーレを補完する形となったことを指摘した。

オペラ《メシドール》のフィナーレと、第3幕に位置するバレエ「黄金の伝説」のフィナーレに類似性が見られるという林の指摘を受けて、中村は、後者が前者の紋中紋なのではないかという仮説をもとに、バレエ部分の検討をおこなった。「黄金の伝説」は、ゾラとブリュノーにとっては重要な要素であったことが書簡から読み取れる。しかし、オペラ座での初演時には冒頭へと移動されたり、当時の批評家たちに酷評されたり、果てはベルギーでの公演では削除されたりと、1917年に楽譜に対応する形で再演されるまで不遇な扱いを受けていた。「黄金の伝説」の物語がオペラ全体の物語の象徴であると受け取るには、すっきり対応しない構成であることが原因と考えられる。しかし、バレエ内に

登場する黄金が「charité 慈愛」の黄金であるという表現に注目すると、バレエにおいてもオペラ全体においても、黄金（＝慈愛）の崩壊が語られていることが見えてくる。実は、《メシドール》が執筆される数年前に書かれたゾラの『ルーゴン＝マッカール叢書』第18巻『金』では、charitéとそれを象徴する金銭を否定し、「justice 正義」によって社会は改善されなければならないという思想が初めて脇役によって語られるが、《メシドール》以後に展開する『三都市』・『四福音書』の両シリーズにおいては、それが主人公によって声高に唱えられ、実現されていくことになる。その狭間の時期に書かれた本オペラ作品においては、その思想の萌芽が、黄金の崩壊という物語の紋中紋に現れていたと考えられる。また、この「黄金の伝説」を導入するヴェロニクという登場人物は、初期作品『マドレーヌ』のヴェロニクと同様、ゾラのこれまでの作品に登場してきた、運命の審判を告げる不吉な予告者の特徴を継承している。しかしその実、彼女が担う予告と実現の内容を精査すると、後期作品に登場する、より良い未来の社会を切り拓く justice を告げる予告者の先駆けとしても見られる。このように語りの構成および登場人物の機能から見て、本オペラ作品は、ゾラ思想および創作技法の転換期を形成しているということを明らかにした。

中村が着目したヴェロニクの予告と実現に関して、成田はブリュノーの音楽におけるライトモチーフ（以下、LM）の使用法を検討した。デトランジュ（1897）が言及した27のLMのうち、ヴェロニクと「黄金の伝説」に関連するものとして首飾り（LM12）、幼子イエス（LM13）の二つが挙げられる。ヴェロニクが「黄金の伝説」について語る場面（第1幕第3場、同第5場、第2幕第5場、第3幕第1タブロー＝バレエ音楽、同第2タブロー第5場）においては、いずれもLM12, 13が使用されている（バレエ音楽はLM13のみ）。第3幕第1タブローにおいては、最初と最後にLM13と七連符の輝かしい音型を施したイ長調によるセクションを設けることで、バレエ音楽としての独立性を際立たせ、「黄金の伝説」の物語としての枠を形成している。第3幕第2タブロー第5場でもLM12, 13が用いられ、ヴェロニクの予告が実現したことを表わす。さらに、第4幕第5場最終盤におけるLM12, 14, 3, 8の使用、教会の鐘の音と諸聖人の連祷の使用は、古い信仰（キリスト教の聖歌）と新しい信仰（豊穡・労働・真実・正義）の融合とも解釈できる。このように、ライトモチーフの使用法からも、ブリュノーがゾラの作品の世界観を忠実に具現化していることが分かる。

その一方で、川上が着目したのは、林が見出した《メシドール》と「黄金の伝説」の対応関係と、それに対して中村が提唱した紋中紋という概念である。これを受けてまず川上は「そもそも音楽の中に音楽がある、いわば「曲中曲」という構造を作り出すということとはどのようなことなのか」という問いを立て、ベートーヴェンの作品 110、シューマンの作品 17、リストのピアノ・ソナタの 3 作品を挙げ、終止の用法による中断と復帰という共通構造から説明した。もうひとつは、ケクランのピアノのための 16 の組曲《ペルシアの時》作品 65 についてである。この作品にはふたつの紋中紋が確認され、その一方（第 2 曲）は「前望的 prospective」であり、もう一方（第 14 曲）は「後望＝前望的 rétro-prospective」であった。川上はケクランの著作に引用された《メシドール》の譜例の多さと、その再演への予言めいた願望の記述から、ケクランが熱心な《メシドール》支持者であったことを指摘し、「《ペルシアの時》の紋中紋構造は、おそらくブリュノーの《メシドール》における「黄金の伝説」の存在と、その位置の変更に影響を受けたものである」と結論づけた。

最後にコメンテーターの福田が、各発表の要約と補足を行った。ゾラとブリュノーの共作において、作家が自らのイデオロギーよりも音楽的展開を尊重し、また音楽家が作家の主題をフランス的旋法によって表現したこと（林）、両者ともに紋中紋としてのバレエシーンで黄金の複合的な重要性を表現し、新たな予告者像としてヴェロニクが設定されたこと（中村）、《メシドール》に現れる 27 のライトモチーフは連続して重なり合いながら、フィナーレにおいて文学思想の音楽的実現に至ること（成田）、《メシドール》においては調構造でも予告とその実現が緻密に計算されており、同時代のケクランにはとくにブリュノーの影響が顕著であること（川上）などである。4 名の発表はいずれも、ゾラの自然主義美学は連続的に発展し、晩年の象徴主義や音楽芸術への接近によって独自の進化・深化を遂げたこと、そして音楽史のカノンにおいて不当に忘却されたブリュノーが、音楽と文学の協同において果たした重要な貢献について浮き彫りにした。

そのうえで福田からは、台本の核となる「黄金の伝説」の着想源についての補足があった。『ルーゴン＝マッカール叢書』には「or 黄金」の比喩が頻出し、多くの場合帝政の金メッキ趣味を象徴する。『獲物の分け前』（1871）からすでに、投機師サッカーが黄昏のモンマルトルで事業への夢を語り、「パリに金貨の雨が降る」未来を幻視する場面が現れる。その続編『金』（1891）では、

貨幣経済の廃止を唱えるマルクス主義者シジスモンと、オリエン特经济圈の繁栄を望むカトリックのアムランが、「argent 金」の両義性を体现する。さらに傍観者カロリーヌ夫人が、「金は毒をまきちらし破壊もするが、未来の人類を育む腐植土でもある」、つまり善悪両方の根源であると看破する。この幻視的な語りは、小説の中盤および終行で2度現れ、《メシドール》において顕在化する豊饒の地オリエン特への聖書的な幻想、および新たなタイプの予告者の出現を準備したと考えられる。音楽と文学の協同による「象徴主義」へと接近する新たな「自然主義」の萌芽という観点から、ゾラを再読する可能性が開かれたといえよう。会場からも複数の質問が寄せられ、活発な議論によって充実したワークショップが締めくくられた。

一部、文学研究の枠に収まらない内容を含む本ワークショップであったが、フランスオペラを結節点としつつ、様々な分野の研究者が意見を交換する機会を作ることができたことに意義があった。このワークショップによってゾラの文学的営為の多様性が改めて認識され、さらに、文学と音楽の共同研究がさらに盛んになるきっかけとなれば大変嬉しい。

Ⅱ 書評

大場静枝（著）『抵抗のブルターニュ 言葉と文化を守った人々の闘い』、小島遊書房、2023年

評者：宮川朗子（広島大学）

「二つの文学をもつほど、フランスは偉大なのです」とは、アベル・フランソワ・ヴィルマンが、プロヴァンスの詩人フレデリック・ミストラルを励ました言葉として伝えられている。しかし、フランスには二つどころではない数の地域語とその文学が、各地で今日まで継承されている。

フランスにおける地方文学は、確かにさまざまな興味を掻き立てるが、実際に触れてみると、躊躇うことも多い。表記法が統一されているとは限らない地

域語で書かれたテキストの読みづらさ、散見される一徹な、そして時に排他的傾向に向かう民族主義を掲げる作家の扱い方の難しさに加え、地方文学の問題を包括的に論じたアンヌ＝マリ・ティエスの研究（1991）で指摘されたとおり、フランスにおいて文学作品の評価は、おおかたパリで決定されるからだ。

本書では、こういった数々の厄介な問題を踏まえた上で、特異かつ重要な地域であるブルターニュの歴史、文学、言語が明快に論じられている。

第一部では、古代から二十世紀前半までの歴史を概観するが、ここで注目させるのは、フランスの「正史」では見落とされがちだが、ブルターニュの命運を左右した数々の事件である。それらは、ローマ帝国によるラテン化を免れたブルターニュの奥地の存在、百年戦争における一つの紛争に過ぎないと評価されがちなブルターニュ継承戦争の末、この地のフランスへの帰属が決定的となったこと、当初大革命を歓迎したブルターニュの人々が反革命へと転じたのは、司祭に国家、法律および国王に忠実であることを宣誓させた聖職者民事基本法（1790）を多くの司祭が拒否したことや、さらにこの地から大量の兵士を徴用すべく発令された三十万人動員令（1793）が原因として考えられることなどである。これらの事件に加え、ブルターニュにおいて、フランス語とは異なる語派にあるブルトン語が話され、その言語文化が継承されてきたことから、ブルターニュの民族主義者たちにとってフランスは、長らく「隣国」であり、併合されてからは「意地悪な継母」（ブレイモール）だったことも指摘される。この観点に立つなら、ブルターニュが自立を保つためにフランス以外の国との関係構築に腐心してきた理由、フランス側に立つなら、王国から共和国に移行しても変わらぬ「単一にして不可分」という原則を揺るがしかねないこの地が、しばしば問題化していた理由が理解できよう。

第二部はブルターニュ文学に捧げられ、本書の中核をなしている。ロマン主義時代に全世界的に注目を浴びたラ・ヴィルマルケの民謡集『バルザス＝ブレイス』（1839）とこの書を巡る論争をはじめ、ブレイモール、カミーユ・ル・メルシエ・デルム、ロパルス・エモンなど、強い民族主義的性格のために扱いくなくなっていた作家たちの作品を再評価している。そして、これらの作家たちの活動を通して、地方文学の作家たちの苦悩——言語の選択（フランス語で書くか地域語で書くか）、地域語で書き、読者の少ない作家となることへの覚悟、表記法を巡る議論など——を浮かび上がらせる。さらにティエスが指摘したような、パリの文学思潮の影響も指摘される。そもそも近代のフランスにお

いて地方文学が注目されたのは、「地方色」を重視するロマン主義が興隆し、サンドやネルヴァルなどの「中央文壇」の作家も、地方の民話や民謡に関心を示した時代であった。中でもブルターニュは、「われらが祖先、ガリア人」の土地として注目を集めたという。このような状況における『バルザス＝ブレイス』の人気は驚くことではないが、この民謡集の評価を下げた要因として著者が指摘する、古謡や詩がもてはやされたロマン主義時代から、散文が主流で、実証主義の影響を受けた写実主義や自然主義の時代への移行も実に示唆的だ。事実、『バルザス＝ブレイス』の「学術的」価値に疑義が挟まれる論争が起こる1867年は写実主義の時代であり、この頃の地方文学運動であるプロヴァンス地方のフェリブリージュが全国的な注目を集めた要因として、「自然主義作家」ドーデの『風車小屋だより』（新聞・雑誌上の発表 1864-73、初版 1869、第2版 1879）の影響力を再確認できるからだ。

第三部では、地域語衰退の問題が取り上げられる。第一部、第二部においても、すでにその要因として、大革命後に全国的に推進されたフランス語の公用語化、地域語禁止令（1902）により司祭たちが民衆にブルトン語で話さなくなったこと、第一次大戦時にブルターニュに課された過酷な動員の結果、この地方出身の多くの兵士たちが、帰郷後も戦地で使用していたフランス語で話し続けたことが指摘されていたが、第三部では、それらに加え、将来性があり、「品がいい」、「とてもかっこいい」言語に思えたフランス語への志向の強さという要因も統計資料から導き出される。その結果、ブルトン語は、親子間で伝えられなくなり、ユネスコの分類では「潜在的に脆弱な状態」に認定されているという。しかしながら著者は、ブルトン語が「文化遺産」となってしまうことへの危機感を徒に募らせることなく、この言語が従来とは異なる方法で学ばれ、少しずつ話者を増やしていることに希望を見出している。この状況の好転は、バイリンガル教育の整備から雇用の創出まで、ブルターニュで取り組まれている政策に負うところが大きい。なかでも、二十一世紀が多言語社会であることを踏まえ、フランス語とブルトン語に加え、英語も取り入れたトリリンガル教育を採用したカトリック系私立学校の例は興味深い。地域語教育が、郷土愛のみならず、現代社会の多言語状況への適応能力を育むうえでも有益であることは、現代の言語教育の指針を考える際の参考事例となるようにも思われる。

このように、本書では、ブルターニュ文化の特徴が、歴史によって育まれた民族性やパリとの関係、さらには世界の言語状況との関係という幅広い視点から明らかにされている。ここで指摘された問題と他の地方文化が直面している問題との共通点も多いため、フランスの地方文化を考える際にも有益であるが、本書は、それだけに留まらず、フランス語文学の複数性や言語教育に関する示唆的に富む一冊にもなっている。

中地義和（編）『ボードレール 詩と芸術』《日仏会館ライブラリー》1、水声社、2023年

評者：北村 卓（大阪大学名誉教授）

ボードレールの生誕 200 周年となる 2021 年には、フランスの内外でさまざまな記念行事が企画された。日本でも中地義和氏らが中心となり、日仏会館による行事の一環として「ボードレール—詩と芸術」と題するシンポジウムが、コロナ禍で 1 年遅れたものの関係者による周到な準備を経て 2022 年 6 月 18-19 日に開催された。本書はその成果である。

編者の中地氏によれば、本書の焦点は、ボードレールにおける「詩と芸術批評の関係」と「芸術諸ジャンル間の共鳴」にある。全体は 5 部で構成され 19 編の論考が収められているが、各部を構成する論考の間に見て取れる連関はもちろんのこと、セクションを越えた呼応関係も随所認められる。きわめて綿密に企図された構成といえる。また個々の論文はいずれも興味深いテーマを扱うと同時に論文としての密度が濃く、現在のボードレール研究の水準の高さを示すものとなっている。近い将来、本書のフランス語版が「ボードレール年鑑」第 27 号として刊行されるという。日本におけるボードレール研究がさらなる飛躍を遂げる機縁となることを願う。以下、簡略ながら各論のトピックを紹介しておく。

第 1 部「ボードレールと美術」には以下の 6 編が収められている。まず、「現代生活」から「現代性」を抽出した画家ギースおよび絵画における現代性をイギリス的側面から光を当てるアントワヌ・コンパニオン氏「反現代生活

の画家」。ルグロ、マネ、ファンタン＝ラトゥールといったクールベ以降の画家たちとボードレールの関係に照明を当てる三浦篤氏「ボードレールとポスト・リアリズムの画家たち」。散文詩「紐」の詳細な読解を通してそこに「近代の芸術家が自分自身に向けるアイロニー」を見いだす吉田典子氏「マネに捧げられた散文詩「紐」をめぐって」。その絵にボードレールが「ソネットにも通じる無限のメカニズム」を読み取る画家の重要性を指摘するジャン＝リュック・ステンメッツ氏「パンギィ＝ラリドンを読むボードレール」。ベルギー滞在時にボードレールの精神的苦痛を和らげた宗教芸術を論じるアンドレア・スケリーノ氏「ボードレールとベルギーの美術」。そして最後に、「一八四六年のサロン」で彫刻に下したボードレールの否定的評価が、そこに「未開であることの創造性」を認めて覆る過程をたどるオーレリア・セルヴォーニ氏「ボードレールと「未開」の芸術」。

第Ⅱ部「ボードレールと音楽」は2つの論考からなる。ボードレールにとって美術批評で用いる比喩でしかなかった音楽が1860-61年のヴァーグナー体験によって独自の重要な位置を占めることになる展開を、異なるジャンル間や諸感覚における照応のメカニズムとともに明らかにする中地義和氏「ボードレール批評における音楽」。そして、ボードレールのヴァーグナー体験をめぐり詩と音楽における創造的精神の共通性を論じるアンリ・セッピ氏「ボードレールと音楽——ヴァーグナーの場合」。

第Ⅲ部「ボードレールの詩学」には以下の6編が含まれる。ジャンヌ詩篇に至って「深さ」の次元をもつ詩的身体が形成されるにいたる過程を明らかにする吉村和明氏「〈サラ〉から〈ジャンヌ〉へ——初期ボードレールにおける詩の形成」。当時の古典教育と伝統的テーマ「パッコスの凱旋」に着目しつつ、時代の流れを受けて生成するテキストの変遷をたどる畠山達氏「「屑屋たちの葡萄酒」制作の舞台裏——「パッコスの凱旋」が意味するもの」。聖遺物（形見）の換喩性に失われたもの／時空に対する欲望を読み解く鈴木和彦氏「形見としての換喩——「バルコニー」読解」。エネルギーの互換性という観点から「無能なガラス屋」と「貧乏人を殴り倒そう！」に切り込む岩切正一郎氏「奇妙な友愛的平等」。すべてが平準化される現代生活に出現する伝達不可能性をボードレールの散文詩に見る鈴木啓二氏「現代生活と伝達不可能性——「貧しい者たちの眼」をめぐって」。そして、所定の観念や道徳に奉仕する「哲学芸術」を批判したボードレールが、その派に属する芸術家の中で例外的に評価したド

イツ人画家を論じる富成信氏「ボードレールとアルフレート・レーテルの「反動的な詩篇」」。

第IV部「ボードレールと女性」は以下の3編。ジャンヌに対しては詩的表現が複数化して多様なイメージが流出するのに比し、サバティエ夫人に対しては崇拝すべき対象として一元化に向かうとする平野啓一郎氏「ボードレールの女性観——その一元性と多元性」。ボードレールの「地獄落ちの女たち」が女性同性愛表象の系譜におけるパラダイムの転換となったとする中島淑恵氏「ボードレールと女性同性愛」。そして松浦寿輝氏「ボードレールの遅さ」は、「描きたい欲望」に見られる、愛する女性の眼差しの下で「ゆっくりと死んでいく」ことへの願望、それと一見対立する「役立たずのガラス屋」における突発的な行動がいずれも「時間」の外に逃れたいという同一の欲望に発しており、この2つの間の葛藤にこそボードレールの詩の魅力があるとする。

最終の第V部「ボードレール受容」では、『悪の華』刊行に際してむしろイギリスやロシアで正当な評価を下す論評が生まれたと指摘するアンドレ・ギュイヨール氏「国境を越えるボードレール——最初の徴」。最後は、海老根龍介氏の「日本文学の近代化とボードレール——中村光夫・河上徹太郎・小林秀雄の場合」、これまで正面から論じられることのなかったボードレールに関する言説レベルでの精緻な受容研究で締めくくられる。

本書は高度な専門性を備えているため一般の読者には近寄りやすい印象を与えるかもしれないが、ボードレール略伝としても読める中地氏による「略年譜」、また畠山氏による充実した「読書案内」が付されるなど、専門家以外の読者にも配慮がなされており、ボードレールの世界への扉が開かれている。また「人名索引」があるのもありがたい。

さて、ボードレール生誕200周年では、本書で紹介されている行事のほかにも、2021年12月18-19日、京都大学人文科学研究所の主催で「ボードレール生誕200周年記念 <時間-生>芸術の研究——ボードレールとその受容」と題されたシンポジウムがオンラインで開催され、若手・中堅の研究者に平野啓一郎氏や青柳いつみこ氏らが加わって熱い議論が交わされた。なお、このとき姿を見せていたボードレリアンの山田兼士氏が2022年12月に、また中堀浩和氏が本年4月に逝去された。この場を借りてご冥福を祈りたい。

評者：高岡尚子（奈良女子大学）

著者は2019年に『イメージで読み解くフランス文学——近代小説とジェンダー』を刊行しており、本書にはその際に用いられた手法が存分に生かされているが、絵画などを主とする「イメージ」全般から「モード」（服飾）へと対象が変化したことにより、さらにその解像度が上がっているように思われる。

本書は六章からなるが、その半数が、著者が長らく研究対象としているバルザックの小説の分析にあてられている。扱われる作品は、最初期の『ふくろう党』（1829）〔第一章〕をはじめ、1830年代後半から1840年代前半にかけて執筆された長編『幻滅』（第三章）、さらには、モーフリニューズ公爵夫人、後にはカディニャン公妃となるディアヌを主要人物とする『骨董室』（1838）および『カディニャン公妃の秘密』（1839）〔第四章〕と幅広い。これらの章を続けて読むことで、バルザックの作品世界の特徴が概観できると同時に、革命期から第一帝政期、王政復古期、七月王政期という流れのなかで、人々の意識や価値観がどのように変化していくかを、登場人物たちが纏う衣装を通じて確認することができる。

とくに第一章と第三章においては男性用モードの特徴が詳細に示されていて興味深い。『ふくろう党』については共和軍の歩兵連隊長ユロや、その敵対者である王党派のモンローラン、ユロの後に主導権を握るコランタンのほか、舞台となるブルターニュ地方の農民の装いまでが詳細に分析され、「人物の性格や政治的信条と服装には密接な照応関係が見出せる」（p. 37）ことが示される。また、「モード」と言えば女性のもの、というジェンダーに基づく固定的な捉え方には留まらず、『幻滅』を扱った章においては、地方出の美青年リュシアンのパリでの苦闘が、当時の「ダンディ」の理想を獲得しようとして敗れ去る様と重ね合わせて論じられており、男性にとっても装いはその本質（「男性性」とも言い換えられる）が表出するものとみなされていることがわかる。

対して、女性とモードの関係性がより集中的に論じられるのは、第二章（サンド『アンディヤナ』（1832））、第五章（エドモン・ド・ゴンクール『シェリ』（1884））および第六章（ゾラ『ボヌール・デ・ダム百貨店』（1883））においてである。作中に七月革命の騒乱が描かれる『アンディヤナ』について

は、退役軍人デルマール、共和主義者のラルフ、社交界の寵児であり誘惑者のレイモンという男性像への言及もあるが、デルマール夫人である年若いアンディヤナとその乳姉妹で女中のヌンの女性性と二人の関係性を論じた部分がとくに興味深い。結婚によって「夫への隷属状態」(p. 89)に置かれたアンディヤナが経験する閉塞感だけでなく、彼女たちが「クレオール」という属性を共有し、性的なものも含めた強いエネルギーの持ち主であることが示される。とくに、ヌンがレイモンとの逢瀬の際にアンディヤナの衣装を纏って現れる場面と、逆にアンディヤナが、彼の寵愛を失ったことを悲観して亡くなったヌンの衣装を身に着けてレイモンの前に立つ場面を分析した箇所は、彼女たちが持つ性的エネルギーが「変装」を通じて表出する様子を詳細に論じている。

また、第五章における『シェリ』の分析は、女性とモードの間に生じる緊張関係を鮮やかに切り取っていると言えるだろう。ゴンクールが「第二帝政期の社交界の若い娘についての研究」と位置付け、彼女たちの「秘められた女性性」(p. 185)を探り出すことを目的として書いたという本作の本質を問うことは、ジェンダーによる役割固定が世紀前半より一層進んだ19世紀後半のフランスにおいて、女性が置かれることになった過酷な環境を具に観察することへとつながる。9歳にしてすでにサロンの女主人を思わせるシェリは、16歳で社交界デビューすると各所で注目の的となる。だが彼女は「自らの体を使って、自らが『美術品』」になるという主体性を発揮しているように見えながら、その姿が「他者に向けたものではなく、『彼女だけのため』」であり、結果として「シェリは自らの身体を愛するナルシストとして立ち現れている」(p. 215)という指摘は重要であろう。「美」の創造者としての技量は、妻となり母となるという、社会が女性に求める役割を果たすのに不可欠なものとは言えない。この自意識と社会的評価の不一致こそがシェリの心身を蝕み、19歳で彼女の命を奪うことになるのだが、こうした問題は「ルッキズム」に翻弄される21世紀の「若い娘」とも根底で繋がっているようにも思われる。このような病理性はまた、第六章で扱われる『ボヌール・デ・ダム百貨店』に現れる「病的盜癖症」(p. 236)にも通じる。布製品を媒介としてかき立てられる消費への欲望が心身の不調の原因とされ、さらにはその不調が「女性特有のもの」(p. 236)とみなされている、という指摘は重要だろう。

本書を通じて読者は、モードという記号を通じて、ジェンダーや都市と地方、社会階層などさまざまな分別の存在が可視化されるのと同時に、その記号には

強い規範性と排他性が備わっていることに気付くだろう。19世紀フランス社会におけるモードの洗練は、そこに生きる人々に、服飾の持つ規範性に馴化するか、抵抗するか、転覆をはかるか、いずれにしても、何がしかの反応を強いる。本書はまた、その影響がより深刻な形で及ぶのは誰か？という問いにも、私たちを導いてくれる。

ジャン=ポール・グージョン（著）『ルネ・ヴィヴィアン伝』、中島淑恵訳、水声社、2023年

岩切正一郎（国際基督教大学）

本書は詩人ルネ・ヴィヴィアン、本名ポーリーヌ・メアリ・ターンの評伝である（原書は、Jean-Paul Goujon, *Tes blessures sont plus douces que leurs caresses. Vie de Renée Vivien*, Régine Deforge, 1986）。

彼女は1877年にロンドンで生まれた。祖父は初等教育を受けていないヨークシャーの「百姓の倅」だったが、ロンドンに出てきて財を成した実業家である。ヴィヴィアンはその事業の売却益で年金を保証された父を通じて遺産を相続することになり、そのために彼女は結婚も仕事もせずに創作に没頭できた。母はミシガン州生まれのアメリカ人で、二歳の時に実母を亡くした。カナダの寄宿学校で学業を終えると、自由を求めてハワイの叔母のもとへ身を寄せ、二十歳の年、1876年に、ハワイを訪れていた英国紳士ジョン・ターンと出会って結婚した。

この両親から生まれたポーリーヌは、一歳の年から両親とパリのボワ・ド・ブローニュ通り（現在のフォッシュ通り。プルーストの小説ではスワン夫人が散歩をしていた通りである）23番地に住み、九歳のときに父親を亡くした。1890年から1898年頃まで、パリその他の地へ旅行しながらもロンドンに住んだのち、二十一歳で成年に達してからはパリへ戻り、再びボワ・ド・ブローニュ通り23番地に住み、1909年にこの世を去った。

ヴィヴィアンは女性同性愛の詩をみずからもレズビアンであった立場からフランス語で書いた詩人で、「女性として女性同性愛を語った [フランスで] 最初の人物」である。そこが、当時、女性同性愛を扱った書物がどれも「男性に

よって書かれて」いたのと一線を画す点である。そうした書物は「男性の専有物」で、「読者層としては男性の、最も多くの場合覗き見趣味の読者をターゲットとしていた」。それとは違って、ヴィヴィアンが女性同性愛を歌うとき、それは「海藻や堇、百合」を好む彼女がみずから選んで住む音楽的律動と詩情に満ちた愛と悲しみと死の世界である。

著者のグージョンによれば、本書の刊行時、ヴィヴィアンとは、「ある種のフェミニストにとっては旗手」、「女性同性愛のすべての研究においては言及すべき典拠」、「「百パーセントのサッフオー」として女性同性愛者たちから標榜される歴史的文学的著名人」である。いずれもフェミニズムやレズビアンニズムの観点で重要な作家という位置付けだが、グージョンは、彼女の詩行がときおり持つ「引き裂くような調子」、その人生の「奇妙な謎」に惹かれ、長らく流布していた一面的なレッテル貼りから離れたところにあるヴィヴィアンの複雑な姿をとらえようとした。そこには「ヴィヴィアンの作品は、その主題である女性同性愛そのものよりももっと遠いところにまで達しているのではないだろうか」という問題意識があった。

その到達点を採りあてるための伝記的資料と文献資料を豊富に記載しつつ著者による独自の解釈と考察を展開する本書は、刊行後約40年経った今も、ヴィヴィアン研究には必須の基礎文献としての評伝、という性格を持っている。同時に、ヴィヴィアン研究者ではない者にとっては、「生まれ故郷と、母語と、そしてとりわけ自らの家族と」縁を切った女性が、「男性、結婚、妊娠」という「三つの災厄」から逃れ、同性愛と詩のために人生を捧げた、その戦いと遍歴の記録の書として興味の尽きない本である。

レズビアンとしての詩人ヴィヴィアンの位置取りは、第一に、男性の衣裳をまとう傾向のあった19世紀の女性同性愛作家のイメージと対立していた。彼女には人を「狼狽させるような女性らしさ」があったのだ。第二に、男性作家の描く女性同性愛が結局は「暇つぶしか悪徳」と見なされていた時代に、彼女はその愛を肯定することで対立した。そのために真摯なはずの愛は多くの人からは「性的倒錯」と見なされた。そうした点を本書は私たちに指摘してくれる。

新しいレズビアン作家のイメージを作りながら、ヴィヴィアンの作風自体は革新的なものではなく、本書によれば彼女は1900年代の「女流ロマン派」に属し、自分のことを「遅れて来たボードレリズム」と呼び、作家のコレットからは「いささか時代遅れだ」と思われていた。

ヴィヴィアンを構成する精神と肉体のそれぞれに言及するのも本書の特徴である。彼女は、パリに住む幼なじみのアメリカ人で深い教養を持つヴィオレット・シリトーによって「大いなる内面生活」の手ほどきを受け、1899年にヴィオレットを介して知り合った知的なアメリカ人ナタリー・バーネイによって同性愛へ導かれた。やがて「パリで貴顕が頻繁に出入りするサロンを開いていた」リリー・アングルシーとの交際を通じて、「上流社会、国際色豊かな貴族階級、開明的な富裕なブルジョワジー」からなる「1900年代の、ヨーロッパおよびアメリカまでも含んだレスボス社会」の人々の輪の中へ入っていった。

ヴィヴィアンは、大旅行家でもあった。レスボス島、ハワイ、コンスタンチノーブル、そして日本へも旅している。彼女は日本文化に魅了されていて（ポーリーヌはポール・リヴェルスダールという筆名で『根付』というコント集も出している）、ラフカディオ・ハーンに関する本も読んでいた。このハーンへの興味は本書の訳者の中島淑恵氏とつながっている。

本書を読みながら人はヴィヴィアンと同時代の現実から虚構の世界（たとえばブルーストの小説世界）へ足を伸ばす楽しみを持つこともできる。私はヴァージニア・ウルフが造形したシェイクスピアの架空の妹ジュディスを思い浮かべた。ジュディスは芸術家になろうと志すものの、兄のように教育も受けられず、女性であるがゆえに挫折し自殺し、宿屋エレファント・アンド・キャッスルの近くの十字路に埋葬された。「一語も書かずに」埋められた詩人ジュディスは「蘇るでしょう」とウルフは言っているが、ヴィヴィアンは、三百年後に生まれかわって今度は書く人となったジュディスだったのかも知れない。奇妙な符牒だが、1860年代、ヴィヴィアンの祖父の「ターン商会」の看板は、エレファント・アンド・キャッスルの交差点にあった商業ビルに掛かっていた。

「échos（会員投稿欄）ご投稿のお願い」

échos（会員投稿欄）では、会員の皆様から広く投稿を募っています

◇ 内容について フランス語、フランス文学、フランス語圏、ないしは本学会にかかわるものについてのエッセーを広く募集する。例えば、自分とフランス語圏文学とのかかわり、学会とのかかわり、内外の講演会やシンポジウムの体験記、支部会イベントの報告など。

◇ 分量 cahier 2頁分（2000字程度）を上限とする。

◇ 掲載の可否について 研究情報委員会での審議を経て掲載の可否を決定する。掲載の可否については個別に対応していくことになるが、最低限の基準として以下の項目を設ける。

特定の個人や団体への誹謗・中傷のあるものは掲載しない。

「フランス語、フランス文学、フランス語圏、ないしは本学会にかかわるものについてのエッセー」であること。

◇ 締め切り 毎年3月・9月末日

◇

日本フランス語フランス文学会研究情報委員会までメールでお送りください：

cahier_sjllf@yahoo.co.jp

* 掲載の可否についての個別のお問い合わせには、原則として応じかねます。

* 内容に相違のない範囲で、軽微な修正を施した上で掲載させていただくことがあります。その場合にはご連絡いたします。

宛先

書評対象本推薦のお願い

日本フランス語フランス文学会では学会広報誌**cahier**および学会ウェブサイトにて公開する書評作成にあたり、広く対象となる本を募集しています。つきましては、下記の要領により、書評対象として相応しいと思われる本をご推薦いただければ幸いです。なお、ご推薦いただいた本は研究情報委員会で集計し、書評する本を決定させていただきますので、必ずしもご推薦いただいた本の全てが書評されるわけではありません。

◇ 目的 日本におけるフランス語、フランス文学研究の成果を収集し、権威付けされた書評ではなく、内容紹介的な書評により公開する。

◇ 書評の対象 原則として、過去1年間に刊行され、その内容から広く紹介するに相応しい学会員による著書を対象とする。翻訳なども含み、日本で刊行された著書には限らない。フランス文化、映画などに関する著書も排除はしない。

◇ 推薦要領 学会員による他薦を原則とします。著者名・書名・出版社名・発行年月を明記の上、紹介文（200字程度）を付してください。著作のみの送付については対応しかねますので、ご遠慮ください。

◇ 締め切り 毎年3月・9月末日

◇ 宛先 日本フランス語フランス文学会研究情報委員会までメールでお送りください：cahier_sillf@yahoo.co.jp

また、学会ウェブサイト **cahier** 電子版の「書評コーナー」に掲載する書評も以下の要領で募集しております。

◇ 目的および書評の対象 上記の書評対象本と同じ。

◇ 執筆要領および締め切り、原稿送付先 学会員による他薦の書評あるいは自薦の自著紹介で、著書名・書名・出版社名・発行年等を除いて800字以内の原稿を随時受け付けておりますので、上記の宛先にお送りください。

なお、これらの書評のうち**cahier**にも掲載するに相応しいと委員会で判断したものについては、他薦の場合は**cahier**用に2000字程度に手直しをお願いすることがあります。また、自薦の場合は委員会で執筆者を選定して依頼します。

cahier 34

編集 研究情報委員会

発行日：2024年8月31日

日本フランス語フランス文学会

150-0013 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 日仏会館 505

TEL : 03-3443-6671 FAX : 03-3443-6672